

事例項目	02 個に関する指導
概要	支援を要する生徒に対する指導方法の相談
事例提供校	高校： 西部地区 全日制 特支： 天竜特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	・対象生徒について授業参観し、支援方法を助言いただきたいです。
事例の内容	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育コーディネーターが事例提供高校を訪問し、対象生徒の授業観察をしました。また、事例提供高校から各教科・科目の授業で見られる良い点や困っている点などについて、対象生徒の資料を提供していただきました。 ・資料分析および授業観察後、対象生徒に対する支援・指導・対応について、特別支援教育コーディネーターが話をさせていただきました。（高校：教頭、学年主任、担任、副担任が出席）

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生2名の授業の様子を参観していただき、視覚情報を添えて指示することや、振り返りの時間をつくるなど、各教科で困っていることへの具体的な対応方法を助言していただきました。学習できる環境づくりのため、本人達が最も困っていることに焦点を当てた個別の指導計画も作成できました。いただいた助言を参考に支援を続けた結果、2名とも入学当初と比べて学校生活や他の生徒との関係も安定し、確実な成長が見られています。
	特別支援学校 担当者のコメント
	<ul style="list-style-type: none"> ・事例提供高校のなかにも支援や配慮を要する生徒がおり、その実態や困り感について具体的に知ることができました。また、事例提供高校の「令和4年度公開授業」に本校職員5人が参加させていただきました。実際に事例提供高校の授業や個別に関する資料を見せていただいたり、関係する先生と話をしたりすることをおして、指導・支援の状況や課題について把握し、支援方法などを提案させていただくことができました。特別支援教育を進める上で、高等学校において実施可能な支援や配慮を行い、学習や生活で抱える困難さを軽減し改善することができればと思います。生徒の多様で複雑なニーズを理解し、適切な支援につなげていくために、引き続き高等学校との連携を大切にしていきたいと考えています。

まとめ
<p>発達障害等の特徴が見られる生徒が高等学校に在籍している様子が見受けられます。インクルーシブ教育システム構築に向けて、事例提供高校においても特別支援教育を推進しています。集団指導を進める一方で、困難を感じている生徒に対する個別支援や配慮が必要になっています。支援が必要な生徒に対する指導については、様々な困難があることを理解し、一人一人の生徒の教育的ニーズに応じた関わりを教職員間で共通理解し、協力体制のもと進めていくことが大切であると考えます。今後も、高等学校からのリクエストに応じて、支援や援助に努めていきます。</p>

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	01 障害の特性理解・実態把握 02 個に関する指導
概要	一側性難聴児の聞こえに関する相談
事例提供校	高校：中部地区 定時制 特支：静岡聴覚特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	<ul style="list-style-type: none"> ・当該生徒の聞こえの実態を知り、聞こえに合わせた聴覚的支援及び配慮事項を確認したいです。 ・就職に向けて、本人の障害理解を深められるよう、本人に対する情報提供をほしいです。 ・一側性難聴に関する研修会を開き、職員間で共通理解を図りたいです。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）

<ul style="list-style-type: none"> ・難聴に関する担任への情報提供 ・静岡聴覚特別支援学校校内参観 ・在籍校訪問 ・担任及び特別支援教育コーディネーターへの情報提供 <p>（聴力測定結果から分かる聞こえの実態、一側性難聴に関する情報、聞こえに関する配慮事項、就職に向けた本人の障害認識を高めるための支援等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員を対象にした難聴児支援講習会 ・保護者との面談

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	<p>・「就職に向けてどのような支援が必要か分からない」という漠然とした相談でしたが、実態の聞き取りから今後予想される困難や対応方法について具体的な助言をいただきました。また、本人への直接的な支援に加え、職員への研修や保護者面談を実施していただき安心感を得ることができました。専門性のある学校へ気軽に相談できる制度があることは大変心強いです。</p>
	特別支援学校 担当者のコメント

<ul style="list-style-type: none"> ・静岡聴覚特別支援学校「きこえの教育相談だより」を見て、高等学校の養護教諭が特別支援教育コーディネーターに連絡したことで支援に繋がりました。一側性難聴の生活上の困難さは一見すると分かりづらく、当該生徒にとっても困難さの有無等の自己理解が不足している様子でした。 ・本人の周囲に理解者を増やしてより豊かに生きていくためにも、自己理解を深め、自ら困難さを周囲に発信していく力を身に付けていくとよいと思います。一側性難聴の聞こえにくさに対する理解が職場で広まり、当該生徒が同僚等と積極的に関わって活躍する姿を期待しています。

まとめ
<p>自分では気づきにくい困難さをもちながら生活している難聴児にとっては、今回のように周囲に支援を求めていくことの大切さを本人へ伝えていくことが大切であると改めて感じました。コミュニケーション上のトラブル等が生じる前に、早い段階で自分の聞こえにくさに対する自己理解を深めていくことが必要となります。当該生徒が就職後に周囲と関わりながら自分らしく社会生活を送ることができるよう、関係機関と連携して聴覚的支援についても継続的に行っていくことが望ましいです。</p>

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	01 障害の特性理解・実態把握 02 個に関する指導
概要	集団が苦手と感じる生徒の校外学習の参加について
事例提供校	高校： 西部地区 全日制 特支： 袋井特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	・配慮を必要とする生徒について、泊を伴う校外学習の事前、当日それぞれにおいて、班別研修や部屋割の他、見えない懸念事項も含め、配慮の具体例を教えてください。
	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	○入学直後より配慮の必要性を担当が感じていたというこの生徒については、記録から日常生活動作にかなりの困難さがあるようでした。自身の特性についても悩み始めている様子があり、集団行動への拒否感も顕著な状況だったため、以下の通り助言しました。
	・校外学習参加については、本人の意思を担当が聞き取り、必要に応じて合理的配慮をすることが必要です。集団が嫌だという訴えが本人から出た場合は、まず気持ちを受容したうえで、なぜ嫌なのか、ということを困難さに置き換え、整理します。そうすることで生徒が自分で困りごとを整理し、必要な支援を周囲に伝える力を身につけられるようにします。その他、参加の場合、自分で使える支援ツール（スマートフォンを活用したスケジュール管理やメモ機能）や紙媒体のしおりの項目を紹介しました。校外学習中の予想される困りごとについてもリストを作成して提案しました。

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	・事前に班別学習は一人で行いたいという本人の訴えを聞き出し、学校も一部了承しました。特に大きな問題もなく校外学習を終えることができました。高等学校の校外学習は、参加しない選択をする生徒もいる中、本生徒にとっては成功体験となりました。
	特別支援学校 担当者のコメント
	・高等学校の段階になると、保護者も生徒も困りごとは努力で補っていく必要がある、と捉えているケースが多くあります。高校生になると、実際に自分の特性について整理しきれないまま、表面上は大きなトラブルもなく、なんとか自己解決をしながら過ごしている生徒も少なくありません。怖いのは2次障害です。このケースの場合、担任が生徒の特性に気づき、記録を取り始めたことが、周囲の教師の理解につながったのではないかと考えます。

まとめ
・生徒が不安や悩みを打ち明け、学校がその訴えの一部を受け入れるという対応をしたことで、生徒は「気持ちを打ち明けてよかった」と感じ、苦手な集団での学習に参加できたのだと思います。今後も、気になる生徒についての記録を取り、担任や部活動の顧問等関係の教職員で情報を共有し、コーディネーターや管理職を含めた学校体制としてできることを考えながら実践することで、生徒の成長が期待できるのではないかと思います。

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	02 個に関する指導 06 ケース会議
概要	授業中にこちらの指示や説明が理解できているのか不安がある生徒への相談
事例提供校	高校： 西部地区 全日制 特支： 掛川特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	<ul style="list-style-type: none"> 提出物や課題が出せない、何をしてもテンポが遅い、授業中の居眠り、取り掛かりに時間がかかる、機械などへすぐに手がでるため危険、時々泣いて言い訳にくる等の生徒に対して、授業を参観し、実際に本人の様子を見て助言が欲しいです。
事例の内容	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	<ul style="list-style-type: none"> 1回目 <ul style="list-style-type: none"> ・ 高等学校訪問、当該生徒の授業観察をしました。 ・ 主訴の聞き取り及びそれに対する個の捉え方や改善策の提案をしました。（副校長、担任、その他の関係教職員全6人参加） 2回目 <ul style="list-style-type: none"> ・ 高校等学校訪問、当該生徒の参観つまずきの拾い出しと評価をしました。 ・ 授業者への質問とつまずきの評価と解説、改善策の提案をしました。 ・ 願いの引き出しとその共通理解への介入及び組織化への提案をしました。（副校長、担任、その他の関係教職員全6人参加）

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	<ul style="list-style-type: none"> 助言を受けて授業内の困り感がかなり減少しました。上手くいっている点の確認をしました。少人数や興味のある科目を少しずつ区切ってやらせるようにしました。（レポートは1日1枚ずつ実施）家庭で学習をするのではなく授業や放課後の学校の時間内でできる範囲で課題をやらせました。時間を短く区切って達成感や成就感を味あわせることが有効でした。
センター的機能を活用した感想	特別支援学校 担当者のコメント
	<ul style="list-style-type: none"> 手立てで評価できる面を引き出しました。放課後残る習慣がついているのでその時を利用して指導しました。教師が指示するときは、その場でノートに記入させました。課題を他の生徒より早めに出す等の手立てを立てたことで生徒の変容が見られました。まずは、教師の見方や捉え方を変えることが大切です。

まとめ	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師自身の困り事を明確にすること、その困り事を声にあげることによって「困り事を共有できる教師チーム」ができました。「困り事を共有するとチーム」と「改善できるプロジェクトチーム」を立ち上げました。 ・ 「改善できるプロジェクトチーム」で「つまずきの追究・分析の方法」「分析を手だてにする方法」「手立てを具体的に実践する方法」等を具体的に明示しながら現場介入する必要があります。 ・ 「改善できるプロジェクトチーム」が実践した評価に「それでいいんだ。」等の後押し評価をすることが高等学校での特別支援教育現場には必要だと思いました。 	

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	02 個に関する指導 05 学校体制づくりのサポート 06 ケース会議・研究協力
概要	授業中、教師の話に集中して聞けない生徒への対応
事例提供校	高校： 東部地区 全日制 特支： 東部特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	<ul style="list-style-type: none"> ・「注意力が散漫で、一つのことに集中できない」という特性があります。授業中、周囲に迷惑をかけることはないですが、教師の話を書き聞けない様子が見られました。学習意欲が低下してやる気が出ないのかもしれませんが、「注意力が散漫で、一つのことに集中できない」という特性かもしれません。欠席日数も増えています。適切な指導について検討したいです。
事例の内容	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	<ul style="list-style-type: none"> ・高校訪問、当該生徒の授業観察 ・特別支援コーディネーター、授業担当者等とのケース会議（学習意欲の低下、発達障害との関連、実態把握と学習の仕方に関する指導）中学校の内容がどこまでできているかテスト等で把握をします。

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	<ul style="list-style-type: none"> ・当該生徒の実態把握（中学生学習内容）をすると、数学で文字を含む式（中学2年生程度）の計算ができませんでした。Aさんに個別指導をしていると、正負の計算からつまづきがあることがわかりました。そこで、授業を補うために、Aさんにノートを1冊用意して、計算練習から始めました。必要な時には、放課後や休み時間を利用して「計算の仕組みを理解したら、あとは宿題」という形で、1日5題を目標に取り組みました。少しずつですが、Aさんは理解が深まることで、授業中も教師の顔を見て聞くようになりました。
センター的機能を活用した感想	特別支援学校 担当者のコメント
	<ul style="list-style-type: none"> ・学習意欲が低下している生徒は、今までの学習習慣から苦手意識を持っていて「やっても自分にはわからない」「小学校の頃から算数は苦手だったから無理」など、理解することをあきらめてしまう傾向があります。このような場合は、「やればできる」という経験を、スモールステップで達成できるように手助けをしていく方法があります。そのためには、「どこで何がクリアできないために、諦めてしまうのか」を見つけていかなければなりません。 ・高等学校の先生は、数学の授業で下学年内容の習得に向けて指導を進めてくれた。その個別の関りがB君の学習意欲を高めることにつながったと思われます。これを機に先生との関係性も改善され欠席数も減ったことは彼の成長につながり、とてもよかったと思います。

まとめ
<p>生徒の困り感を早期に発見することが大切です。それに気づいたら、本人と相談し、対応策をとり、実践・見直していくことが重要になります。そして、「本人が小さなことでうまく対処できたらほめる」という姿勢で、継続して指導・支援しながらステップアップさせていくことが効果的です。</p>

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。

事例項目	01 障害の特性理解・実態把握 02 個に関する指導
概要	能力の凸凹により、人間関係が築けない。文系科目の授業に参加しないこと等への相談
事例提供校	高校： 中部地区 全日制（私立高校） 特支： 静岡南部特別支援学校

事例の内容	高校からのリクエスト
	<ul style="list-style-type: none"> ・入試の点数は単願上位の成績でしたが、面接結果は良好とは言えませんでした。入学後、教員、同級生の名前を覚え、一人でいることも苦痛ではないようです。特定生徒への興味が強く、早口、独特の話し方で興味のあることや得意分野を話し続ける傾向にあります。 ・提出物（課題）が出せないことがほとんどで、教員の注意等も受けられません。 ・板書を写すことはなく、理数系の授業には参加しますが、文系（国語）の授業は空を見たり寝たりして過ごしています。
事例の内容	特別支援学校からの支援・助言（センター的機能の活用）
	<ul style="list-style-type: none"> ・迷惑行為と捉えず、「本人は困っている」を前提に対応するとよいと思われます。 ・「特定生徒と話をするのは1日1回とする」「話をする時間を3分と決めタイマーで示す」など本人と話し合い、同意を得ながらルール作りをしていくとよいと思います。 ・「人との距離」「パーソナルスペースを数値で示す」「付きまとうと相手は嫌な気持ちになる」など、可能であればSSTを取り入れていけるとよいと思います。 ・分かっているようで、実は分かっていないこともあり得る。提出物（課題）を出すことは、中学校時代とは意義や意味が異なると伝える必要があるかもしれません。 ・板書が苦手さを情報機器（音声入力アプリ、写真）等で補うという手段もあります。

センター的機能を活用した感想	高校 担当者のコメント
	<ul style="list-style-type: none"> ・助言を受け現在、支援中。（経過が分かったところで報告をもらう予定）
センター的機能を活用した感想	特別支援学校 担当者のコメント
	<ul style="list-style-type: none"> ・数年後、大学入試へつながるケースであるが、本校は大学入試について詳しくないので、他校の特別支援教育コーディネーターの力も借りたいと考えました。そこで、地区別の特別支援教育コーディネーター研修会で、本事例について話題提供をしました。すると、本ケースのようことに詳しい特別支援教育コーディネーターがいたので、助言をもらいました。助言内容を相談校に伝えていきたいと考えています。

まとめ
<p>県が示す高等学校と特別支援学校の連携グループ間で始まった相談ケースです。私立校と県立校の垣根を超えた相談ということでも意味深いと考えます。特別支援学校は校種や校内人材によって、持ち合わせる情報量や力量に違い（得意分野、不得意分野）があります。ただし、特別支援学校同士の横の繋がりの強さを生かし、他の特別支援学校に情報提供を求めることができます。</p>

※具体的な支援内容については、当該校にお問い合わせください。